

des N 主語を持つ総称文と状況量化

Des N en position sujet dans les phrases génériques et quantification sur les situations

森香奈絵 (MORI, Kanae)、東郷雄二 (TOGO, Yuji)

Généralement, le syntagme nominal en *des N* en position sujet ne permet pas d'interprétation générique. Il reçoit une interprétation existentielle, ou, contrasté avec un autre syntagme, une interprétation partitive. Cependant, il est possible de lui attribuer une interprétation générique dans des contextes bien délimités. Cet article se porte sur un de ces contextes, à savoir celui dans lequel le syntagme nominal en *des N* est accompagné d'un modifieur. Notre analyse se propose de montrer que le modifieur joue le rôle d'introducteur d'un paramètre spacio-temporel qui entre dans le restricteur de l'opérateur générique. On obtient l'interprétation générique à travers la quantification sur les situations, et non sur les individus.

キーワード : 総称 (généricité), 状況 (situation), 量化 (quantification), 不定名詞句 (syntagmes nonimaux indéfinis), 量化副詞 (adverbes de quantification)

1. *des N* 主語の例外的総称解釈

フランス語で総称文の主語名詞につくことのできる限定詞は *un, le, les* である。これらの限定詞がついた名詞句を、以下では *un N, le N, les N* と表記する。不定冠詞複数形の *des* は、総称の意味にならないばかりか、意味解釈できないこともある。

- (1) a. *Un cheval est un animal utile.*
b. *Le cheval est un animal utile.*
c. *Les chevaux sont des animaux utiles.*
d. **Des chevaux sont des animaux utiles.*

des N が総称解釈できないのは、その歴史的由来 (*de+les* → *des*) が示しているように、*les N* が表わす *N* の集合全体の「部分」を表わすからだと説明されることが多い。総称とは集合の成員すべてについて成り立つことなので、集合の一部についてのみ成り立つのは総称ではないことになる。ところが例外的ながら、*des N* 主語でも総称の読みになる文が存在する。修飾語句が付加されたとき (2)、モーダル文脈 (3)、動詞が相互的關係を表わすとき (4)、左方転位 (5) の場合である。これを「*des N* 主語の例外的総称解釈」と呼ぶことにする。

- (2) *Des rosiers qu'on ne taille pas ne donnent pas de belles fleurs.*
- (3) *Des diplomates doivent être discrets.*
- (4) *Des amis s'entraident toujours.*
- (5) *Des chats, ça miaule.*

「*des N* が部分を表わす」という従来の説明だと、(2) ~ (5) になぜ例外的総称解釈がある

かを説明することができないことは明らかである。本稿では紙幅の制約から、主として(2)のケースのみを扱う。

本稿の筆者の一人は、東郷 (2001)で des N 主語の例外的総称解釈に触れ、このタイプの総称読みは、個体量化ではなく状況量化によって得られるとする分析を提案した。その後 Dobrovie-Sorin (2002)と Heyd (2002) が、ともに東郷 (2001)と同じ方向性を持つ分析を発表した。本稿ではこれらの分析を比較・総合しつつ、なぜ des N 主語の例外的総称解釈が可能になるのかを、主として形式意味論の立場から考察する。

2. des N の「部分読み」と「存在読み」

強い限定詞 (Milsark 1977) である *certain*s, *la plupart de*, *un tiers de* などは、外延が確定した集合の部分を表わす。これを「部分読み」と呼ぶ。部分読みされた主語名詞句には、個体レベル述語を適用することができる (6)。ところが弱い限定詞 (Milsark 1977) である *des* は、(8)のように明示的に対比の文脈を与えないと部分読みができず、このため個体レベル述語を適用することができない(7)。弱い限定詞である *des* は、通常は (9)のように「存在読み」される。

(6) *Certains métaux sont plus légers que l'eau.*

(7) ??*Des métaux sont plus légers que l'eau.*

(8) *Des licornes sont blanches et d'autres noires.*

(9) *Des enfants jouent dans le jardin.* $\exists x (\text{enfants}(x) \wedge \text{jouer-dans-le-jardin}(x))$

このように、*des* のふつうの読みは「存在読み」なので、*des* N 主語が総称解釈できない理由は、(8)のような場合を除き「*des* が部分を表わすから」ではなく、「*des* が存在読みされるから」でなくてはならない。言うまでもなく存在読みと総称解釈は相容れない。それにもかかわらず、(2)~(5)で見たように *des* N には例外的に総称解釈が可能な場合がある。

3. 個体量化と状況量化

総称をめぐる従来の研究においては、*les* N では N の集合を領域として個体量化が行なわれていると考えられることが多い。ここでは総称演算子 GEN を用いた三部構造で示す。

(10) *Les chats sont carnivores.* GEN x [*chat* (x)] [*carnivore* (x)]

これは、「猫のすべての個体について」肉食であることを述べている。しかしすでに述べたように、個体量化という分析に立つ限り、*des* N には「存在読み」か、(8)のような「部分読み」しか与えることができず、総称解釈は得られない。本稿では東郷 (2001)の線に沿って、*des* N に修飾語句が付加された場合、修飾語句が三部構造の制限部に状況項 *s* を導入し、GEN は個体変項 *x* ではなく、状況項 *s* を束縛することで、結果的に総称解釈が生まれるという分析を提案する。例外的に総称解釈できる次の文を例に取ってこの提案を詳しく見てみよう。

(11) Des lions blessés sont vulnérables.

GEN [$\lambda s \exists x [\text{blessé}(x, s) \wedge \text{lion}(x)] [\lambda s \exists x [\text{blessé}(x, s) \wedge \text{lion}(x) \wedge \text{vulnérable}(x, s)]]$]

上の式の制限部は「怪我したライオンがいる状況 s の集合」を表わす。ここではライオンは存在量化されており、des N は存在読みを受けているということが重要な点である。核作用域は「怪我したライオンがいて、かつ弱っている状況 s の集合」を表わす。総称演算子は非選択的束縛子と仮定しており、個体変項 x も状況項 s も束縛できる。しかし、個体変項 x はすでに存在量化子に束縛されており、GEN はこれを束縛することができない。従って GEN は状況項 s のみを束縛し、その結果として、個体についての一般化ではなく、状況についての一般化を表わす。この式の意味は、「〈怪我したライオンがいる状況 s の集合〉は、〈怪我したライオンがいて、かつ弱っている状況 s の集合〉に等しい」というものである。つまり、これは「怪我したライオンのすべての個体」についての総称ではない。「怪我したライオンがいる状況」についての総称的言明である。

上の式のポイントは2点ある。第1点は des N の修飾語句 *blessés* が制限部に入り、状況項 s を導入する点である。この根拠はどこにあるだろうか。この点に関して、Heyd (2002) は興味深い指摘をした。des N の修飾語句は、形容詞ならば述語位置に立てる叙述的形容詞、関係節ならば制限的でなくてはならないという制約がある。

(12) a. Des enfants *malades* sont grinceux. [叙述的形容詞]

b. Ces enfants sont *malades*.

(13) a. *Des *maladies cardiaques* sont dangereuses. [非叙述的形容詞]

b. *Ces *maladies* sont *cardiaques*.

(14) a. Des étudiants *qui ne suivent pas régulièrement les cours* prennent le risque d'échouer aux examens. [制限的關係節]

b. *Des *thèses, qui (par ailleurs) étudient la structure du SN en français*, sont agréables à lire. [非制限的關係節]

Heyd は単に事実の指摘に留まっている。この制約は、「述語位置に立てる形容詞だけが状況項 s を導入する」と言い換えることで理解できる。直感的には、次のような *quand* /*si* 節による書き換えの可否に対応していると考えられる。

(15) a. Des enfants, *quand ils sont malades*, ils sont grinceux.

b. *Des *maladies, quand elles sont cardiaques*, elles sont dangereuses.

cardiaque のような非叙述的形容詞は、名詞 *maladie* と結合して複合的名詞句を形成し、それ自体は状況項 s を導入しないため、GEN は制限部において量化する変数がなく、空量化禁止規則によって非文となる。非制限的關係節の場合にも、基本的には同じことが起きていると考えられる。

(16) *GEN [$\exists x [\text{maladie-cardiaque}(x)] [\exists x [\text{maladie-cardiaque}(x) \wedge \text{dangereuse}(x)]]$]

4. 一回きりの出来事を表わす個体レベル述語

(11)の論理式を立てる際の第2のポイントは、核作用域の述語 *vulnérable* に状況項 *s* を設定しているという点である。des Nに修飾語句が付加され総称読みになるとき、核作用域に入る述語は、局面レベル述語だけでなく個体レベル述語も認可される。

(17) Des enfants qui marchent avant l'âge de 10 mois sont *précoces*.

ところが現在までに、「個体レベル述語は状況項を持たない」とする有力な仮説が提案されており (Kratzer 1995), (11)の分析はこの仮説と矛盾する可能性が出て来る。

局面レベル述語は状況項を持つが、個体レベル述語は持たないという仮説は、次の例にエレガントな説明を可能にした。量化副詞 *rarement* は、(18)a. では局面レベル述語 *aller au cinéma* の状況項を束縛する。これは「映画に行くという状況が稀にしか生起しない」という直感とも一致する。b. では *avoir les yeux bleus* は個体レベル述語で状況項がなく、空量化禁止規則に違反し非文になる。c. では述語は同じく個体レベル述語だが、主語が不定名詞句で個体変項 *x* を導入するので、*rarement* は *x* を束縛することで適格文になるという説明である。この分析は、c. を *Peu de chats ont les yeux bleus.* と実質的に同じものとしていることになる。

- (18) a. Paul va *rarement* au cinéma. *rarement s* [aller-au-cinéma (Paul, s)]
b. *Paul a *rarement* les yeux bleus. **rarement s* [avoir-les-yeux-bleus (Paul)]
c. Un chat a *rarement* les yeux bleus. *rarement x* [chat(x) ^ avoir-les-yeux-bleus(x)]

この説明は *rarement* のような量化副詞を、個体変項も状況項も束縛する非選択的束縛子と見なす仮定に基づいている (Lewis 1975)。これに対して、Berman (1987), De Swart (1996) は、量化副詞は状況項しか束縛しないとする仮説を提案した。この仮説によれば、(18)の容認度の差は次のように説明される。局面レベル述語が表わす出来事は複数回起きることが可能である。ところが、個体レベル述語が表わす性質は、一度その性質を持つとずっとそれが続くというもので、出来事の複数性がない。量化副詞の行なう量化が、状況項が表わす出来事を領域とするものならば、そもそも量化は複数の出来事が想定される場合にしか働くことができない。個体レベル述語は出来事の複数性がないため、量化できないのである。この説明の傍証として、本来なら出来事の複数性がある局面レベル述語でも、(19)の *mourir* のように、その意味特性からして複数性が想定できないときは、量化副詞が働くことができないという事実があげられる。(19)b. で一見すると個体 *un Indien* が量化されているように見えるのは、一度しか生起しない出来事の場合、出来事の数と個体の数が一致するからである。

- (19) a. *En général, quand Anil mourait, sa femme se suicidait. b. En général, quand un Indien mourait, sa femme se suicidait.

本稿では、「量化副詞は状況項しか束縛しない」という仮説を支持し、局面レベル述語のみならず個体レベル述語にも状況項を仮定することに伴う矛盾を回避できると考える。

また次の例が示すように、des N 主語に付加される形容詞などの修飾語句についても、局面レベル述語のみならず個体レベル述語も認可される。

- (20) a. Des enfants *paresseux* vont à l'école en voiture.
b. Des gens *bien élevés* éminent certains propos en public.

上に述べた仮定に従い、個体レベル述語にも状況項を仮定しているので、これらの修飾語句は論理式の制限部に入り、GEN に束縛される状況項を導入する。

5. その他の例外的総称解釈

本稿では(2)のように、des N 主語に形容詞や関係節のような修飾語句が付加された場合の例外的総称解釈を主として扱った。紙幅の制約から、(3)~(5)のケースについては十分に論じる余裕がないが、どのような分析の可能性があるかという展望だけを最後に指摘しておきたい。本稿の提案した状況量化による分析の延長線上で説明できる見通しが比較的に明らかなのは、(3)のモーダル文脈と(5)の左方転位のケースである。

まずモーダル文脈について見ると、des N に限らず un N も含めて、一般に不定名詞句主語の総称解釈を促進するのは「義務的」*déontique* な場合のみで、「認知的」*épistémique* モーダルは総称にならない (Sueur 1977)。例えば *Un préfet doit prendre cette décision.* が総称解釈されるのは、*devoir* を義務的読みを取った場合だけである。モーダル文脈をどのように分析するかについてはさまざまな仮説があるが、そのひとつに可能世界の集合を想定するものがある。もしこの仮説に立脚するならば、*Des diplomates doivent être discrets.* のようなモーダル文脈における des N 総称も、状況量化の前提となる状況の複数性のモーダル世界における対応物として、可能世界の複数性を領域とする状況量化という分析で説明できる見通しが開ける。付言しておく、un N 総称についても述語が局面レベル述語のときには、*Un garçon ne pleure pas.* に見られるように、しばしば義務的意味を伴うので、この問題と合わせて考察することが必要となる。des N 総称でも、*Des agents de police ne se comportent pas ainsi dans une situation d'alarme.* のように、モーダル助動詞を持たなくても総称解釈され、義務的意味が生じることがある。

次に(5)の左方転位のケースである。次の例を見てみよう (Léard 1987)。(21)a. は「サブクラス読み」になり、「昆虫を引き寄せせる木の種類が多くある」という意味である。述語 *attirer des insectes* は主語 *beaucoup d'arbres* に分配的に適用される。ところが左方転位した(21)b. は、「木がたくさんあると、そこには昆虫が引き寄せられる」という意味で、述語は分配的に適用されない。一般に左方転位は述語の分配的適用を阻害する。Léard は左方転位された *beaucoup d'arbres* は、"classe d'objets" ではなく "classe de situations" を表わすと述べているが、正しい指摘である。つまりこの場合、*beaucoup d'arbres* は「たくさんの木 (の種類)」という個体の集合ではなく、「たくさんの木がある状況」を表わしている。

- (21) a. *Beaucoup d'arbres attirent des insectes.*

b. Beaucoup d'arbres, ça attire des insectes.

この分析はそのまま des N を左方転位した総称文に適用できる。左方転位された des N は状況量化されるという本稿の分析がここでも有効だと考えられる。

(22) a. Des chiens dressés, ça obéit vite.

b. Des bonbons, ça ne se refuse pas.

残る(4)の相互的意味のケースについては、いくつかの点を指摘するに留めたい。まず例文の des N 主語はほとんどが ami, sœur, jumeau のような関係名詞である。

(23) Des sœurs rivalisent souvent.

(24) Des aimants s'attirent.

(25) Des jumeaux ont souvent des affinités.

また文が相互的意味になるためには、ふたつの個体が「ある関係に置かれる」ことが必要条件である。この「ある関係に置かれる」ということが、des N の総称解釈に必要な状況の複数性とそれに伴う状況量化を生み出すのではないかと考えられるが、この点についてはいまだ不明な部分が多い。今後の課題としたい。

最後に des N 主語の例外的総称解釈の特殊性を明らかにするには、un N, le N, les N 総称との比較が必要だが、紙幅の制約からそれができなかった。この点については東郷(2002)を参照されたい。

【参考文献】

- Berman, S. (1987): "Situation-based semantics for adverbs of quantification", *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 12, pp.45-68.
- Dobrovie-Sorin, C. (2002): "Généricité et distributivité des indéfinis pluriels", ms. *Colloque Indéfinis et prédictions en français*, 3-5 octobre 2002, Université de Paris-Sorbonne, Paris.
- Heyd, S. (2002): "Prédication et interprétation générique des SN en des en position sujet", ms. *Colloque Indéfinis et prédictions en français*, 3-5 octobre, 2002, Université de Paris-Sorbonne, Paris.
- Kratzer, A. (1995): "Stage-level and individual-level predicates", Carlson, G.& F.Pelletier (eds) *The Generic Book*, University of Chicago Press, pp. 125-175.
- De Swart, H. (1996): "(In)Definites and genericity", M. Kanazawa et al. (eds.), *Quantifiers, Deduction, and Context*, CSLI, pp. 171-194.
- Léard, J. M. (1987): "Quelques aspects morpho-syntaxiques des syntagmes et des phrases génériques", G. Kleiber (ed) *Rencontre(s) avec la généricité*, Klincksieck, pp.133-156.
- Lewis, D. (1975): "Adverbs of quantification", E.Keenan (ed) *Formal Semantics of Natural Languages*, Cambridge UP, pp.3-15.
- Milsark, G. (1977) "Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in

English", *Linguistic Analysis* 3, pp.1-30.

Sueur, J.-P. (1977) : "Quantificateurs et modalités" , *Langages* 48, pp.84-99.

東郷雄二 (2001) : 「不定名詞句と総称」 日本フランス語学会第195回例会発表.

東郷雄二 (2002) : 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」 『総合人間学部紀要』 (京都大学) 第9号, pp. 1-18.